

■ 『稲穂』 インタビュー

ピアニスト・日下部かおりさん（高35回）に聞く

## シユターミッツ四重奏団

# との共演は奇跡のような時間

プラハより来日した四重奏団と共演を重ねているピアニスト。

2010年より毎夏ミュージック・キャンププラハに参加。

室内楽の研鑽を積み、飯田市でも2回目のコンサートを開いた。

——最初に音楽に触れる体験はどんなところ  
にあったのですか。

母は高校の音楽教師でした。私を出産するにあたってピアノ教室を始めましたので、私は気付いたらピアノを弾いてました。ピアノの先生についたのは小学校1年ぐらいの頃からですが、耳で聴いて弾いていたのでは修正がきかないけれど、楽譜通りに頭を使って弾けば曲の表現には選択肢があるということを教えていただきました。子どもの頃はピアノが上手いと思っていて、よく褒められるから発表会は好きで、いつも出たかったのですが、



●くさかべ・かおり

豊丘村生まれ。国立音楽大学器楽学科ピアノ専攻卒業。ピアノ独奏、室内楽の研鑽を積む。ピアノソロ、ピアノデュオ、声楽、器楽の伴奏ピアニストとして数多くのコンサートに出演。また、声楽家としても活動している。

思春期になってそういうことでないことに気が付き、本番に弱くなって悩みました。過剰な自信と過剰な自己否定はどちらも同じ私なのかの自意識なので、バランスが悪かったのでしょう。

——どんな高校時代を送ったのですか？

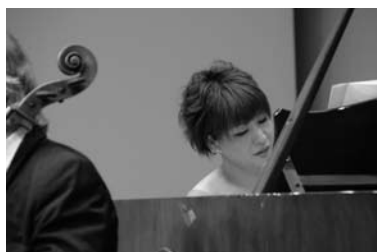
中・高時代と演劇部でした。大学でもミュージカルをしていたくらい演ずることに興味が沸いていたのです。実は高校のときにお琴は師範までとったのですが……。

——いま、飯田高校の箏曲部は全国でトップレベルに入るぐらいですが……。

当時は箏曲部はなかったのですが、母もお琴を教えていましたし、今飯田高校で教えていらつしやる大平先生に、私も個人レッスンを受けてました。

——進学校の飯田高校では音楽家とかアーティストなど自己表現に繋がる仕事を選ぶ人はあまり多くないですね。高校時代にこそ育まれるものがあると思うのですが。

私のときには何人かが音楽の道に進もうとしていて、国立音大くにたちには教育科の2人とピアノ科の私で3人が、武蔵野音大にも先輩がいました。今も音大を受験したいという高校生はいますが、学生の個性や気質よりもとにかく国公立大学、という傾向が強くなっているように感じます。表現に繋がる心の豊かさが日本人の教育観には少ないのかもしれないですね。特に地方にはそれを評価する視点は少ないと感じます。美術でも音楽でも自分の分からないものを認めていくのが豊かさなのでしょうが、日本人は分からない領域のことを許容していくことが苦手な民族なのかもしれませんね。



この曲はなにを歌っているのか…感じながら

——音大の受験やエリート集団の音楽大学ってどんな様子なんですか。

私のピアノの先生の松村和子先生、長谷部裕子先生が国立音大の久保田恵子先生のお弟子さんでしたので自然に国立音大を受験していました。音大は、皆ピアノが弾けて、そこそはと思っている人たちがばかりの、ちょっと異様な世界でしたね。半数が付属の音高から上がってくるんですが、田舎から出てきた私にはとてもびっくり。彼らについていけなくてカルチャーショックを受けました。音楽会や演奏家などの話題は彼女たちには普通のことであり、力のある先生の門下生たちの話題などは、私には生まれて初めてのことばかりでしたね。

——いつ頃から将来プロの演奏家になろうと考えたのですか。

田舎出の一人っ子で、人とかするのが好きだったので、大学に入ってすぐに私はソリストタイプではないと思い始めました。演奏家たちの伴奏ばかりしているとソロができなくなるという、普通は先生がストップをか

けるのですが、私の先生は学生時代しかできない経験をしなさい、という方だったので、いろんな演奏家たちとのアンサンブルをさせてもらいました。一、二年生の頃はオペラが好きでオペラ団体の伴奏ピアニストになりたいと思っていましたが、三、四年生の頃にそれも違うと思い始めました。今思うと伴奏誰々ではなく、ソリストと対等にピアノ誰々と書かれる仕事をしたかったです。自分をもっと表現したかったです。

——ピアニストとして表現したいのは自分自身の感情的なものですか、それとも作曲家の描く世界の表現なのですか。

例えばそれは、私とパートナーでないと言現できないものではあるのだけれども、互いに音楽を感じてアプローチしていくと、私たちにしか生まれないサウンドができ、あとはお互いに感じることをやっていくことで音楽が連れていってくれる領域があるのです。相性が合う人と演奏してみると、話してるときよりも、その人の弱いところや意外な側面も見え、その人をより理解できる感覚があり



聴いたことのないリズムと音色で楽器を操る

ます。一方で演奏前に綿密に打ち合わせなくしてはならない方もいて、探り合って互いに息が合わないと思うときもあります。私は人に合わせるのがうまいところがあるのですが、天才と呼ばれる人と違うのは逆にそこなんでしょう。

——ピアニストではどういう人が好きですか。ずっとイーヴォ・ポゴレリチが好きでした。シヨパンコンクールで彼が落選したときに審査員のピアニストのマルタ・アルゲリッチは「天才の価値を分らないシヨパンコンクールならば審査員をやめる」と言って当時はとてもセンセーショナルになりました。彼の音の切り方、フレーズのもっていき方は普通の人には絶対真似してはいけない弾き方なのですが、ものすごい説得力で迫ってきます。楽譜では説明できないくらいのゆっくりしたテンポで弾いたり、最初の音を弾いたとき、そのアタマから最後まで彼の中では完璧に構成されているんです。ポゴレリチさんの演奏を聴いたときには、自分の内面を見透かされているようで、本当にこの人は天才だと思いました。

——チエコのプラハに留学されてますね、それは……。

留学は40歳過ぎてからの、ここ4年のことです。母が亡くなった後、師の久保田恵子先生から半ば強制的に「プラハに行きなさい」と。ずっとピアノを弾いてきたけれど、私にはこれというものがなくて、今思うと自分の生活の何かを変えたかったんだと思います。プラハでの最初の1年はピアノのソロコースで私のレパートリーを掘り起こして一流の先生に指導していただきました。それまではテクニックの難しいところを何度もさらって弾くことに一所懸命だったのですが、曲を一つ一つの声部にばらして聴きながら、これは何を歌っているのか……を感じていくと、そこに音楽が生まれるという考え方に変わりました。音楽を喜びとして、ひとつの曲を音楽として感じる事が一番大切なのだと言われ、先生方から言われました。また、恣意的な意図で音楽を捻じ曲げるのではなく、音楽が何を言っているのかをじっと聴いてあげると、自分の音楽が生まれてくるとも言われました。



おとぎの国のシュターミッツ・カルテット

た。演奏がいやらしく表現されるとき、音楽の流れではないことをしてやろうということなんでしょう。

——古い歴史をもった街プラハの、人々の暮らしぶりや音楽との関係をどんな風に感じましたか。

プラハの人たちは質素で、古いものを大事にし、美しいものに対して敏感です。街は家の窓の外に花を飾って、通りを歩いている人が楽しめるように設計されています。クーベリック・トリオのチェリストのカレル・フィアラさんは「文学と音楽と建築とカルチャーの溢れたこの国を愛している」とよくいいます。プラハの人は愛国心が強いです。メンバーの一人のクヴィタ・ビリンスカ先生は今の私のピアノの先生でもあります。プラハでの2年目に世界的に活躍するチエコの名門弦楽四重奏団シュターミッツ・カルテットの日本ツアーで共演してみようとの話をいただきました。そのとき私も室内楽はすぐ演奏したかったので「やります」と即答しました。

1回目の飯田公演では飯田の友人や音楽仲

間がずいぶん動いてくれました。しかし弦楽四重奏団が日本には少ないからでしようか、相談した多くの窓口では室内楽の公演に対してあまり理解も興味も持って頂けず、残念に思うことが多々ありました。

——飯田で暮らす人たちの中にも音楽を楽しむその文化はあるのですが、協奏曲のようなクラシックを楽しむ文化と何が違うのですか。

チェコはヨーロッパの真ん中に位置しているので歴史的には他国に侵略されることが多かった。何度も国がなくなり一個人として生きることは許されない時代が長く続きました。発言にも気をつけなければならず、それで人形劇も発達したともいわれます。私がよく行く喫茶店の近くのヴィシエフラド国民墓地にはドヴォルザーク、カフカ、ミュシヤや画家、建築家、演劇人などの芸術家が眠っています。そこには政治家は一人もいません。政治は自分たちを幸せにしてくれないけれど、自分たちが自分たちでいられるのは芸術家がいるからだというのがブラハの人たちの価値観だそうです。チェコ人が立つところ



誰もが「ブラハの町を愛している」という

は音楽であり、人形劇であり日常が芸術とともにあるのです。

——日下部さんは俳優や声優としても活動されていたと聞きましたが、今は……。

大学を卒業するときに青年座研究所に入り、通っているときにアニメの声優のオーディションを受けたんです。受かってしまい、アニメの主人公の役をやっていました。母が倒れてしまったのを機に豊丘村に帰ってくることになって、結局ピアノを弾くことになりました。『ラ・ムジカ』La Musica は私の音楽教室の名称でイタリア語で音楽という意味ですが、そこでやりたいことは学ぶ一人ひとりがより楽しい音楽人生を送れるために、いろいろな引出しをもって、互いに与え合えながら成長することです。

——育ってきた飯田の風土には、音楽表現においてどんな影響がありましたか。スラブとの共通点はありますか。

前回の飯田公演でドヴォルザークのピアノ五重奏曲を演奏しました。飯田からフルーツラインをその曲をかけながらドライブしている

時、あまりにも飯田の風景に溶け込んでいるスラブ的な曲で、涙が止まらなくなってしまっただけで感動したのです。ドヴォルザークの時代、統治の影もあり、エリートのチェコ人はドイツ語をしゃべらなければならなかったのですが、貧しい居酒屋の息子であったドヴォルザークはドイツ語ができなかったのです。彼の土臭い曲の表現というのはそこに繋がるのだと思います。チェコの音楽は日本人の感性に合うといわれています。魂が近いところにあるのでしょうか。カルテットの人たちは、南アルプスの雪山の情景は、とてもロマンチックと飯田の印象を言います。海がないのは同じですが、チェコにはあんな高い山はないのです。

——音楽のある生活とは、かおりさんの人生にどういう意味をもっているのですか。

プログラムを決めるときは、シユターミッツ・カルテットに私がリクエストを出していましたが、今回はカルテットの方から「スークの五重奏曲をやるう」と言ってくれた。メンバーと公民館からホテルまで歩いていたとき、飯田市の広報スピーカーからドヴォル



公演パンフの一部から



A. L. ドヴォルザーク

ザークの『家路』が流れたんです。そのときその作曲家の曾孫でありヴァイオリニストであるヨゼフ・スークの五重奏曲を知ってるかという話が出てきました。そして、「それをやるう」ということになったんです。ところが鉄のカーテンの時代の作曲家なので、日本では楽譜が手に入らない。今までも2枚しかCD化されていないという誰も知らない曲だったんですが、素晴らしい名曲なんです。それを皆に聴いてもらいたいと思っていています。普通に生きていたら出会えないものにかうして出会えたという感じなんです。そういうびつくりする素晴らしい曲との出会いが音楽で起こりうるのです。作曲家のこころを知るようになるのです。シユターミッツ・カルテットの皆さんと共演できるなんて、私にとっては、聴いたことのないリズムと音色で、楽器を操るそのお姿は、まるで魔法使用のようなんです。決して妥協せず音に音楽に誠実に向き合ってきた方々との共演は、私にとって奇跡のような時間なのです。

(インタビュー／福澤郁文)